遮熱資材によるクルクマの葉焼け防止

１　普及活動のねらい

クルクマ研究会オリジナル品種「グリーンブーケ」は主力の県育成品種「アイルージュ」より葉が大きく薄く、アイルージュと同じ管理では葉焼けが発生する。昨年度までの試験により、３～５万 lx となるよう遮光管理することで葉焼け発生が減少することが推測された。しかし、既設の黒色遮光ネットの遮光率が高い農家では、長時間遮光による徒長を懸念し昼間４時間程の遮光とし、上位葉の葉焼けによる品質低下が発生していた。「グリーンブーケ」に適した管理方法を確立するため、遮熱資材の効果について実証した。

２　普及活動の成果

クルクマ栽培ハウスのベンチ上に遮熱資材２種（ダイオネットシェード清冷（遮光率 40～45%）、ワリフ明涼（遮光率 50%）を６月中旬に常設した。地温が 40℃を超えたため､昼間は２枚の資材間に既設の黒色遮光ネットを半展張して対応した。昨年度は、黒色遮光ネットが展張していない時（10 時～15 時以外）に照度６～８万 lx となっていたが、今年度は１日を通して最高照度は３～５万 lx と安定し、45℃以上であった気温地温は 40℃以下を維持できた。重度の葉焼けは昨年度の 17～23%から９～13%に減少し、出荷不能となる上位展開葉の葉焼けは今年度発生しなかった。草丈は、明涼区が昨年度より２㎝高く、清冷区は５㎝低くなったが、どちらも出荷可能な草丈であった。今年度の結果から、実証農家は遮熱資材を活用した管理方法を次年度以降行うこととなった。

３　普及活動の内容

対象農家と実証内容について打ち合わせ、試験区の設置をし、環境調査の結果を元に試験区の改良を行った。環境調査、生育調査の結果を適宜まとめ状況を説明し、出荷物に対する評価や葉焼けの程度について意見交換した。「グリーンブーケ」栽培農家を集め、実証結果を報告し次年度の栽培条件について検討した。

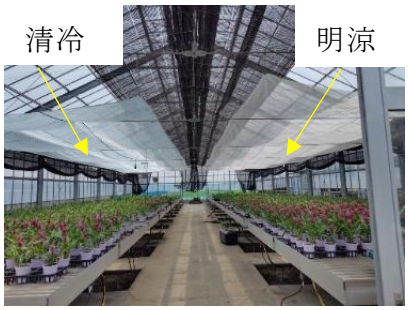


写真１　試験区設置状況
資材間に既設黒色遮光ネットを半展張



写真２　出荷時の草姿

重点課題名	４　新技術導入・商品力強化による花き産地の育成
普及事項名	（４）クルクマ新品種「グリーンブーケ」の安定出荷対策技術の確立